



## 新発見の欧州所在倭学書とその周辺\*

スエン・オースタカンブ  
(京都大学・外国人特別研究員)  
(sven.osterkamp@rub.de)

本稿の目的は、Maurice Courant の *Bibliographie coréenne* (朝鮮書誌、1894～1901 年刊) などから早くから知られているもの以外の、2010 年新たに発見できた欧州所在倭学書 2 種およびそれらと関連した資料を紹介することにある。

### 1. 18 世紀末の『伊呂波』と Hervás

#### 1.1. Borg.cin.400 とその伝来など

最初に取り上げたいのは、バチカン図書館所蔵のもので、整理番号の Borg.cin.400 から明らかなように、Stefano Borgia (1731～1804) の旧蔵であり、しかも漢籍扱いとなっている。今までまったく知られていなかったというと、厳密に言えばそうでもないが、漢学者 Paul Pelliot のバチカン図書館漢籍目録に次のように載せてある (1922 年成立；本稿では Pelliot/高田 1995: 43 より引用する；括弧内は高田による補注)。

400 Syllabaire japono-coréen, par ordre de l'iroha. 8 ff. in folio. [Iroha 伊呂波, célèbre manuel de japonais pour les Coréens. Porte des notes manuscrites en marge.]

(いろは順の日韓音節文字表、8 丁、フォリオ。〔韓国人のための、有名な日本文字手習書である伊呂波。欄外に書き込みあり〕)

後述するように、遅くとも 1798 年までにローマに到着し、Borgia の手に入ったはずであるが、死去して 2 年経った 1806 年に Borgia の漢籍コレクションと共に布教聖省の所蔵となったことは、1 オと 8 ウに見られる「Sac. Cong. De Prop. Fide」(Sacra Congregatio de Propaganda Fide、すなわち布教聖省) と読める印から確実である。そして、更に時代が下って、1901 年にその漢籍コレクション全体がバチカン図書館に移管され現在に至る。

幸いなことに、ヨーロッパに到着するまでの経路も 8 ウにあるラテン語による書き込みからほぼ知ることができる。

Litteræ Japonicæ cum Sinicis, quas quidam Minister Coreæ misit mihi

Fr. Romualdus Refr

(朝鮮の或る従者が私にくれたところの、漢字がついている日本文字  
改革派フランシスコ会の修道士 Romualdus)

ここでいう Romualdus とは Romuald のラテン語形で、天文学を専門とするフランシスコ会修道士として 1782 年に北京に到着したポーランド人 Romuald Kocielski (漢名は羅機洲、また羅機淑とも) のことを指すに違いない。遺憾ながら、Romuald の生涯については未だ不明な点が多いが、Wiśniowski 1999 によると、その生没年は 1750～1791 年とのことである。ただし、異説もあり<sup>1</sup>、なお詳しい研究を必要とするところである。とはいえ、一応本書は 1780～1790 年代の北京滞在中に Romuald が朝鮮燕行使からもらった後 Borgia に送ったものと考えて差し支えなからう。当時の燕行録などからこれに関連した情報が得られるかどうか、今後の課題の一つである。(なお、他の布教聖省の宣教師と同様に、Romuald にも、

\* 本研究は日本学術振興会の科研費 (09F09205) の助成を受けたものである。

<sup>1</sup> 例えば Willeke (1991: 270, 脚注 47) は、Van Damme 1978 によりながら、1797 年まで北京に滞在し 1799 年、南アメリカに行く途中で死去したとする。Willeke は Rochemonteix (1915: 537 など) などと同様に苗字を Koscieski とするが、誤りであろう。或いは別人か。

定期的に布教聖省の書記——1770～1789年の間、Borgiaがこの役を勤めた——に報告書を提出する必要があったはずで、この方面にも何らかの記録が残っていると期待される。）

さて、本書の、書き込みを別にした内容であるが、『捷解新語』の重刊本（の一部、すなわち東洋文庫本と奎章閣本）と文積本（それぞれ1781・1796年刊）の附録として知られているものと同一である。後者の刊本は奎章閣所蔵のもの以外伝わっていないようであるが<sup>2</sup>、文積本の附録には初めより6丁しかなかったことがその凡例によって知られる。これに対して、Borg.cin.400は重刊本の附録と同様に8丁までである。そして、今後詳しく調査する必要があるが、重刊本と文積本の附録およびBorg.cin.400はいずれも同じ板木から刷られたものと見られる<sup>3</sup>。

ところで、夙に浜田（1965: 45 [1970: 89]）で推定されていたとおり、これはやはり『捷解新語』の附録に過ぎないものとしてではなく、独立したものとして印刷されたことがBorg.cin.400の発見によって漸く証明できる。

その柱は魚尾を存するのみで、書名の記載なく、また張付も別になっているところからすれば、本来捷解新語とは別のものとして開板され、その再刷以後のある版より、〔1970年：本来弘治五年板の『伊呂波』改訂版の意味を以て、『捷解新語』とは別の独立した書として開板され、その再刷以後の、或る版より、〕合綴されるに至ったものかとも思われる。

また、安田（1980:176）は上の推測を「まず首肯されるべきもの」と見做し、更に6丁版と8丁版に関して次のように述べている。

かくて重刊改修本について、「伊呂波」を欠く版、①から⑥まで〔=6丁版〕を持つ版、①から⑦まで〔=8丁版〕を完備する版の、少なくとも三段階は考えなければならぬ。尤も今日見られるのは第一・第三段階のそれであるが、文積本から第二段階のそれもあったことが推察し得ないかと思う。そして第三段階のそれは、文積本以後の増補でなければならない。

しかし、Romualdの没年を1791年と考えてよければ、8丁版が「文積本以後の増補」によって成立したものではありえない。そして、没年を考慮外としても、1796年以後朝鮮で印刷されたものが1798年までにローマに到着したとは、蓋然性の乏しい推定であろう。

ただ、最後の2丁を1796年以後の「増補」と見做す以外の可能性がないかということ、必ずしもそうではない。片仮名と五十音図が中心となっているその2丁は文積本の利用に当たって役立たないと言ってよいほどのものであるため、独立した書として既に完備した8丁のものから、文積本の書体に厳密に係わっている最初の6丁のみを採って附録とした可能性も十分あるからである。どちらの解釈にしても、証明はできないのであるが、文積本の6丁しかない附録自体は、8丁に亘るものが1796年までに成立していなかったことの確証とはなりえない。そうすると、「第二段階」の重刊本が存在したという仮説を立てる必要もなくなる。

また、重刊本伝本のうち『伊呂波』が付載されているものは、ちょうど「原刷に近いと目される」奎章閣本と「最も後刷のもの」とされている東洋文庫本であるため、安田（1960: 10）のように「『伊呂波』付載の有無によって版の前後を云々することは出来ないであろう」（辻 2008:142）とは、正鵠を得た結論と言わなければならない。独立した『伊呂波』の存在が確認できた以上、場合によって合本されたりされなかったりしたと考えても差し支えないように思える。

<sup>2</sup>ただし、韓国の国立中央図書館に、登録当時は（檀紀 4282.11.15 とあるから 1949 年らしい）「古 01688」、現在は「古 331-3」として 12 巻 4 冊の写本がある。匡郭と界線、区切り小点などを欠いている以外は、刊本にそっくりなので、影写本と思われるが、暫く不明とする。

<sup>3</sup>例えば、諸本ともに、5ウで最初の「兄」に対する例の〕にその上半が、あるいは6オで最後の「こそ」に対するヨ空の空の横棒に右側の半分がかけている。これ以外にも、諸本の前後関係を物語る差異が見出されるが、複製本のみでは補筆であるとかを判断しがたいところがあるので、ひとまず保留する他ない。

結局、8 丁版『伊呂波』の初刊年代を明らかにするには依然として資料が足りないが、1796 年以後などとするのが疑わしい。

## 1.2. 『伊呂波』の内容と Borg.cin.400 の加筆部分

さて、『伊呂波』の内容に移るが、言うまでもなく、従来知られていた 8 丁版とまったく差異なく次の七つの項目からなっている。

① 「伊呂波真字半字竝録」	1 オ～1 ウ	平仮名、片仮名とその字源
② 「伊呂波吐字」	2 オ～2 ウ	「〇ん」を表わす合字
③ 「伊呂波合字」	3 オ	拗音などを表わす合字
④ 「伊呂波真字草字竝録」	4 オ～6 オ	平仮名、変体仮名とその字源
⑤ 「簡格語録」	6 オ～6 ウ	書簡用語など
⑥ 「伊呂波半字竝相通」	7 オ～7 ウ	五十音図（行が中心）
⑦ 「伊呂波半字横相通」	8 オ～8 ウ	同上（列が中心）

日本を指す「本邦」（7 オ）などから分かるように日本側の文献に基づいたものであるが、安田(1970 [1980: 175])で指摘されているとおり、貝原益軒の『和漢名數』が主な典拠となっている<sup>4</sup>。日本文字に関する部分に限らず、『和漢名數』全体が遅くとも 18 世紀後半の実学者の間でよく知られていたようである<sup>5</sup>。

一方、これ以外の倭学書伝本に類例を見ないことは、音注や注記など数多くの加筆がなされていることである。すなわち、①から④までは、それぞれの項目の内容を説明した、簡単な注記が付け加えられており、さらに①から⑤までは、漢字による音注がほとんど全面的に施されている。誰の手になる加筆か決め手がないが、朝鮮人であったことは疑いなかろう。

まず、「かな」を指すに「倭諺」を以ってするが、中国（や日本）の文献には見られないような用法である。これに対して倭学書関係の文献には珍しくない。文釋本『捷解新語』の凡例や、重刊本の序にその例が見出されるのみならず、例えば『看羊録』（姜沆著）、『海槎録』（金世濂著）、『海游録』（申維翰著）、『奉使日本時間見録』（曹命采著）、『海上録』（鄭希得著）などの、主として『海行摠載』所載の紀行録にもある。『伊呂波』の本文には「倭諺」という言葉がないところと、18 世紀末のものを含む倭学関係の文献に集中しているところからすると、注記を施した人物にある程度倭学の背景があったと考えるのが妥当なように思える。

また、音注のすべてが仮名に対するものではなくハングル音注に対するものとしか見做せず朝鮮語の干渉も顕著であるところ、そして、ハングル字母の一部がかけている音注のうち青で訂正されたものがあるところから（1 オ：「な」に対するㄴのㄴ、5 ウ：「兄」に対するㅇのㅇなど）、ハングルと朝鮮語の知識を備えていたことが窺える。

<sup>4</sup> また、江戸後期の節用集の一部——例えば『〔増廣字便〕倭節用悉改囊〔二行兩點〕』（1762 年刊）、『〔真草二行訓音兩點〕大榮節用福壽藏』（1775 年刊）や『大成無雙節用集』（1821 年刊）など——にも「倭音五十字」や「本朝五十韻」として『伊呂波』の⑥と⑦に当たるものがあるが、これらも⑥と⑦と同じく『和漢名數』の「倭音五十字」（69 ウ～71 オ）によったと見られる。

<sup>5</sup> 例えば、李德懋（1741～1793）の『蜻蛉國志』にその書名が挙げられているのみならず（『青莊館全書』卷之六十四、民族文化推進會の影印本 164 頁）、「日本帝王世系」（36 ウ～40 ウ）など『和漢名數』より引用されている部分もある（145～147 頁）。ただし、日本文字に関するところにはその影響が見えず、『和漢三才圖會』卷第十五が典拠となっている（165～166 頁）。

また、李瀛（1681～1763）の『星湖先生全集』卷之十五に載録されている「答洪錫余 戊寅」の書簡に「聞有和漢名數一書至國。日本人所撰。極有可觀」などとあり、卷之十七所載の「答趙正叔 戊寅」の書簡にも「新傳和漢名數書」に関する言及が見える。戊寅年とは 1758 年に当たるものであろうが、李瀛の情報源としてその弟子安鼎福（1712～1791）が考えられる。後者の『順菴先生文集』卷之二に「上星湖先生書 戊寅〔中略〕倭書有和漢名數爲名者二卷。卽我肅廟庚午年。貝原篤信之所著也。〔後略〕」とある。

もう一つの理由は、同じく音注と音訳字に係わっているものである。すなわち、音訳字の選択は、当時の官話などにおける字音に直接基づいたというよりも、朝鮮の漢学書に見られるそのハングル表記を媒介にして行われたと思しきものがある。

以下で、Borg.cin.400における加筆の部分(①～④)を翻字し(ただし、原本には句読点なし)、考察を加えることとする。

### ① 「伊呂波真字半字竝録」

「朝鮮諺字、以青圈別之。今以青正字書於各字之上。此是呼音也。憑漢音呼之。」(1オ)

「伊呂波即倭諺字也。真字如第一行第一層以字也。以此以字變為第一行第一層い字。是為倭國諺字也。半字如第一行第一層イ字謂、倭諺い字之省用半字也。今紅圈以別之。第一行第一層이字即朝鮮諺文字也。凡倭字朝鮮字、以音相準。此下皆做此。」(1オ～1ウ)

『和漢名數』の「伊呂波真字〔稱之真字假字〕」(71オ～71ウ)と「片假名伊呂八本字」(71ウ～72オ)に基づいて、標準的な平仮名と片仮名およびその字源が示されている<sup>6</sup>。刊本では既にその音価を表わすハングル音注もついているが、Borg.cin.400となると、更に漢字による音注が付け加えられている。その音訳字を漢学書におけるハングル表記(右側音、以下同様)と共に五十音図で示せば、以下の通りになる<sup>7</sup>。

ア行	阿 아	伊 이	無 우	伊腭反 예 (이+혜)	我 오
カ行	假 가 (削除) → 基阿反 가 (기+아)	基 기	姑 구	解 계	過 고
サ行	撒 사	十 시	時 스	時腭反 세 (시+혜)	所 소
タ行	大 다	知 지	之 즈	之腭反 제 (즈+혜)	朶 도
ナ行	那 나	泥 니	奴 누	奴腭反 네 (누+혜)	娜 [노]
ハ行	權 화	稀 히	胡 후	腭 [혜]	和 호
マ行	瑪 마	米 미	沒 무	瑪腭反 메 (마+혜)	瑪我反 모 (마+오), 音抹 모 <sup>8</sup>
ヤ行	亞 [야]		魚 유		約 요
ラ行	辣 라	里 리	盧 루	列腭反 례 (려+혜)	騾 로
ワ行	瓦 와	伊 이		伊腭反 예 (이+혜)	我 오
ん	耶伊銀三合音 엔 ([여]+이+인)				

これでわかるように、漢学書におけるハングル音注にそのまま従えば、刊本に既にあったハングル音注にまったく一致することになり、例外は一つもない。そして、右側音の音韻体系にない音節となると、反切や合音として示されている。

現行の普通話、漢学書の左側音、当時の満州文字による音注などと比較してみれば、不思議な対応が見える。すなわち、「す」に対する「時 ス」、「ち」に対する「之 즈」などがそれであり、中国資料の日本語表記でも窺えるように、どちらかといえば、それぞれ「し」「ち」に当たるべきものである。ただし、「時」「之」の声母が[s-]・[tʂ-]などでなく[s-]・

<sup>6</sup> 不思議なことに「ん」の字源を「元」とするが(1ウ、6オ)、『和漢名數』(71ウ)の「无」を「元」に誤ったものか。

<sup>7</sup> ただし、「和」「魚」の二字は、『譯語類解補』(1775年刊)では『譯語類解』(1690年刊)や『朴通事諺解』(1677年刊)など17世紀の資料と同じく호・유となっているが、同じ18世紀の資料である『朴通事新釋諺解』(1765年刊)などにはそれぞれ히・위とある。後者に従うと、『伊呂波』のハングル音注と合わなくなる。

<sup>8</sup> 모と読む字が少ないため、最初は思い出せずいちおう反切で示したのであろうか。それ以降の場合はいずれも「抹」字のみとなっている。因みに、漢学書の一部に마と読まれていることもあるが(『朴通事諺解』上23ウ、同24ウなど)、「も 모」に対するものとして、やはり『譯語類解補』54ウなどに従って모と読むべきものである。

[ts-]である方言もあり（北京大学… 1989: 60, 66）、また、右側音でも普通話における si 対 shi、zi 対 zhi の対立が見られなく、すべてス・ズとある。

右側音	左側音	例	右側音	左側音	例
ス	ㄙ	四思 (si)	ズ	ㄗ	子紫 (zi)
	ㄙ	似詞 (si, ci)		ㄗ	字自 (zi)
	ㄙ	使詩 (shi)		ㄗ	之至 (zhi)
	ㄙ	是時 (shi)		(ㄗ)	—

続いてエ列に関してであるが、反切で示されたものがほとんどで、単字による音注は、계・혜に対する鮮・腭のみである。漢学書の右側音でㄗ韻に属するものは牙喉音の声母に限られており、계・혜以外はそのまま使える音訳字がなかったためである。（『西儒耳目資』では一部の漢学書の左側音のように-iai となっており<sup>9</sup>、kiai・k'iai・hiai に加えて iai の例もあるが、それらは、普通話で ai・ya などとなっているのと同じく、漢学書の右側音でも他の애・야などと合流している。『西儒耳目資』から予想できる예が『伊呂波』の時代には存在しなかったようである。）

わざわざ○腭反といった反切をもって音注を施すなどは、中国資料の日本語表記には見当たらず、いずれもㄗを含むハングル音注にひかれ、それらをできるだけ忠実に漢字で表わそうという意図から生まれたのであろう。

エ列の中でも最も注目すべきものは、之腭反という音注であろう。重刊本『捷解新語』まで一般的であったように、『伊呂波』でも「て」にㄷが当てられているが、この反切ではㄷでなく、「凡倭字朝鮮字、以音相準」と言いがたい제 (< ㄗ+혜) になってしまう。音注を施した人にとってはㄷと제とが同音となっていたと見てよかろう。同じごろ刊行された『倭語類解』にもㄷ・ㅈの口蓋化（破擦音化）の例が少なくないが、同時に、ㄷが제と同様に読まれるのを避けようとしてㄷ表記の対策がとられたため、Borg.cin.400 のような結果にはならなかった。

## ② 「伊呂波吐字」

「吐即合二字為一音之謂。如倭諺い字ん字合為第一行第一層之いん字也。下倣此。」（2 オ）

「○ん」式の閉音節に当時の中国漢字音に相応しいものがなく、そこで合音などで表わさざるを得なかった場合があるが、これを別にすれば特に問題がないため、第一行以外のは省略することとする<sup>10</sup>。

いん	ろん	ほん	にん	ほん	へん	とん	…
인	론	환	닌	혼	헨	돈	
因	落恩合音	還	呢因反	和恩合音	腭恩合音	多恩合音	
인	론	환	닌	혼	헨	돈	
	<로+은		<니+인	<호+은	<혜+은	<도+은	

<sup>9</sup> 「解」字を例にとると、『朴通事諺解』『老乞大諺解』『譯語類解』『譯語類解補』などでは左・右側音ともに계となっているが、『朴通事新釋諺解』『重刊老乞大諺解』のように左側音の方を개とする資料もある。

<sup>10</sup> 以下の表は、一番上の列から下へと、①『伊呂波』のかな表記、②『伊呂波』のハングル音注に加えて、③Borg.cin.400の漢字による音注、④音訳字の漢学書における右側音からなっている。反切や合音による音注の場合、更に⑤反切や合音に用いられた各漢字の右側音が示されている。

### ③ 「伊呂波合字」

「合字如第一行第一層し字ん字合為しや字、第二行第四層ち字や字く字合為ちやく字之類也。」(3オ)

「や字」とあるべきところに「ん字」とあるのは②の解説にひかれた結果かも知れない。しかし、③で問題となるのは、どちらかといえば、漢字による音注の方である。

しや	しゆ	しよ	りよ	きよ	ちや	くわ	かく	やく
샤	슈	쇼	료	교	차	과	각	약
撒	數	所	落	脚	咱	瓜	基阿各<合音>	亞阿各<合音>
사	수	소	로	교	자	과	각	약
							<기+아+거>	<야+아+거>

とく	ちやく	しよく	きやく	ひやく	しやく	しよく	ちやう
독	차구	쇼구	가구	하구	샤구	쇼우	쇼우
多各<合音>	咱姑	所姑	價姑	下姑	撒姑	所無	昨無
독	자구	소구	가구	하구	사구	소우	조우
<도+거>							

みやう	りやう	きやう	ひやう
묘우	료우	교우	효우
抹約<合音>無	約無	脚無	鉢約<合音>無
묘우	요우	교우	효우
<모(마)+요, 우>			<보+요, 우>

①の「て」に対する「之腭反」と同様に、また朝鮮語側の状況を反映していると思われる。CVとCyVとの区別は、子音がㄱ k-/ㅎ h-/ㅍ p-/ㄹ m-の場合厳密に守られているのに対して、ㄴ s-やㅈ c-といった子音なら、そうではなく、結局、音訳字の「撒」「所」が無差別に「さ・そ」にも「しゃ・しょ」にもあてられているのである。音注を施した人はどこの出身か、未だ知るすべがないが、CVとCyVとが合流してしまった方言を話していたに違いない。ただし、同じㄹに対して、或いは「落(로)」或いは「約(요)」とすることに些か疑問が残っているが、後者はㄹの脱落と認めてよいであろう。こういう語頭におけるㄹ脱落もCVとCyVとの対立の消滅も18世紀末から起こった変遷とされているが(許 1965: 442-444 など)、やはり Borg.cin.400 の加筆部分もこれを反映しているのである。

### ④ 「伊呂波真字草字竝録」

「草字即第一行第二三四字為第一字之草字、第六七字為第五字之草字。倭諺真字以紅圈別之。其下草字不圈。以漢音亦書本字下。」(4オ～4ウ)

ここで注目すべきは、真字という用語の使い方である。①の解説では、「い」の字源となった「以」字をそう呼ぶように、万葉仮名の意味であるが、この用法は『和漢名數』「伊呂波真字〔稱之真字假字〕」(71オ～71ウ)のそれに従ったものである<sup>11</sup>。しかし、ここでは、変体仮名を指す「草字」に対する、(①で羅列されている)標準的な平仮名という意味

<sup>11</sup> 「伊呂波真字〔稱之真字假字〕」でいう「真字假字」も、同じく貝原の著作である『日本釋名』(1699年成立、翌年刊、中巻「人事」)、「真字假字」の項や『萬葉假名遣』(1698年、15ウ)、『伊呂波字考録』(1736年、上4オ～5オ)などから明らかのように、「真字(或いは真名)のように見える仮字(仮名)」、つまり「楷書のままで表音的に用いた漢字」という意味で万葉仮名の別称である。

でしか解釈できない。なぜならば、紅圏で囲まれた「倭諺真字」はいずれも平仮名で、その字源となった万葉仮名ではないからである。

④の音注は、原則的に①と一致している。もし音訳字が異なる場合にも、①と④のそれが必ず同音のものなので、結局大した差異はない。

	か	く	に	は	め	も
	假→基阿反	姑	泥	樺	瑪腓反	瑪我反、音抹
④	基阿反	顧	呢	華	馬腓反	抹

### 1.3. *Paleografía universal*

Borg.cin.400の発見の契機となったのは、スペイン人 Lorenzo Hervás (1735~1809)の手になる、1800年ごろヨーロッパの学界で知られていた表音文字のすべてを対象とした世界文字研究書、*Paleografía universal*であった。印刷されるには至らなかったが、1805年の日付をもつ、スペイン語の手稿3冊(スペイン国立図書館、Mss. 8496~8498)という形で現存する。

その具体的な内容はあまり知られていないようであるが、朝鮮文字に関する記事があるということは、実際にはHervásの名著 *Catálogo de las lenguas de las naciones conocidas* (1800~1805年刊)からも知ることができる。巻2、68頁に曰く

En mi paleografía universal pongo varios alfabetos japones, y uno coreano, que he visto impresos en china: y el alfabeto coreano á mi parecer es propio de la Córrea.

(私の *Paleografía universal* では何種類かの日本文字と朝鮮文字を挙げている。朝鮮の文字は固有のものらしく思われる。)

この巻2は、1801年刊とほいうものの、結局その脱稿を1798年以内とせざるをえないため<sup>12</sup>、日本・朝鮮文字に関する記述は1798年あるいはそれ以前に既に何らかの形で成立していたことがわかる。しかも、ハングルの資料として最後まで『伊呂波』以外には何もなかった<sup>13</sup>ので、*Catálogo*で言及する「alfabeto coreano」もやはり現存本と同様に他ならぬ『伊呂波』のそれであったはずである。すなわち、*Paleografía universal*は、Borg.cin.400の伝来年代を明らかにするための好資料なのである。

また同時に、在日オランダ商館長をつとめた Isaac Titsingh (1745~1812)所蔵の『三國通覽圖説』の諺文伊呂波を1799年に紹介した Joseph Hager (1757~1819)と違って、Hervásは朝鮮の刊本を利用する機会を得たが、そういう資料に基づいてその実例を示しながらハングルを扱うものとして、欧米最初のものであるという点でも注目すべきであろう。とほいうものの、ハングルの解読に仮名とその読み方に関する正しい知識——18世紀末のヨーロッパにしては依然としてかなり得がたいもの——が不可欠であったため、結局その解読に成功したとは決して言えない。

<sup>12</sup> 『カタログ』は合計6巻に亘るもので、それぞれ1800・1801・1802・1804・1804・1805年にマドリードで刊行された。巻3と巻4との隔たりは偶然の結果ではなく、むしろ『カタログ』の成立過程とそれに係わる外的事情を反映するものである。著者は1798年にローマを去って一時的にスペインに帰っていったが、巻3まではすべて帰国前の成立である。巻1の自序が「ローマにて1798年2月15日」という日付を持っているのみならず、先行する巻3も同じ1798年にマドリードの出版者に送った旨が巻4の序論から窺えるのである。これらに対して巻4以後は、Hervásが1802年にローマに戻ってから起草したもので、少なくとも巻4~5は1803年に成立した。

<sup>13</sup> 1805年の手稿にさえHager 1799や『三國通覽圖説』に関する言及がない。また、尹有一(1760~1795)の協力を得て1790年に北京で刊行された主の祈りや同時に作られたハングル音節表の存在もHervásは知らなかった。

(小倉1940: 363fでは「意義不明」の「歌謡」とされているが、主の祈りの漢訳を朝鮮漢字音で読んだものに過ぎない。尹有一の手になった両資料は1790年代にヨーロッパにも送られ、Louis-Mathieu Langlès (1763~1824)を通じてJean-Pierre Abel-Rémusat (1788~1832)のハングル研究資料となった。)

アジアの諸文字に関する部分（全3冊の第1冊にあたる）の翻字・翻訳・注釈が準備中であるが、*Paleografia universal* とその研究史における意義などについて別の機会で詳しく紹介するつもりである。

## 2. 『倭語類解』と Siebold・Hoffmann・Medhurst

### 2.1. Siebold 旧蔵本の運命

最も早く『倭語類解』の存在を知った西洋人といえば、彼の Philipp Franz von Siebold (1796~1866) であろうが、1823年に来日して間もなく草稿が出来上がった「Einige Worte über den Ursprung der Japanesen (日本人の起原についての一言二言)」では既に参考図書として挙げられている<sup>14</sup>。1830年代になって、Siebold の大著『日本』にも『倭語類解』関係の言及が所々あるが、Siebold と同様にドイツのヴェルツブルクを出身地とする助手 Johann Joseph Hoffmann (1805~1878) が担当していた部分を中心となっている。

ほぼ同時に、すなわち 1835年に、イギリス人の宣教師 Walter Henry Medhurst (1796~1857) によって『倭語類解』の英訳本とでもいうべき『朝鮮偉國字彙』がバタヴィアで出版された。底本に用いたものとその行方については今まで不明とするほかなかったが、この年代的な一致を偶然とは決して言えず、Medhurst による翻刻は、浜田説 (1977: 204) の通り、Siebold・Hoffmann が言及、利用した『倭語類解』と「おそらく同じ本によって行われたと思われる」。

さて、今まで『倭語類解』の刊本として広く知られていたのは、駒沢大学濯足文庫蔵本と韓国の国立中央図書館蔵本の合わせて2部のみであるが、今回の調査で、もう1部が現在マンチェスター大学附属ジョン・ライランズ図書館の所蔵となっていることがわかった。未詳の点も数多く残されているが、以下でその概観を述べることにする。

ジョン・ライランズ図書館蔵本の由来を考える上で重要なヒントとなるのは、バチカンにある『伊呂波』と同様に漢籍扱いとなっている点である。なぜならば、1901年の購入以来ジョン・ライランズ図書館の漢籍コレクションの基層をなしているのは Bibliotheca Lindesiana のそれであり、後者の漢籍と同様に 1895年刊の *Bibliotheca Lindesiana. Catalogue of Chinese books and manuscripts* に記録されているからである<sup>15</sup>。65頁に435番（現在の整理番号はこれをそのまま受け継ぐ）として次のようにある。

435.—**Wo yü lei chieh.** Comparative vocabulary of the Chinese, Corean, and Japanese languages. 2 pên [=本、すなわち巻] in 1 vol. 285 × 200 mm.

題目の英訳は『朝鮮偉國字彙』（目録の41・62頁、456番を参照）のそれと一致し、それに基づいたと思われるが、原題は漢語読みとなっており、目録の編者 John Phillip Edmond によるものであろう。

更に遡ると、1881年の *Bibliotheca Lindesiana. Hand list of the boudoir books* にも載せてあるが、99頁には次のようにある。

**Vocabularium.** Wei jii lui kiai, sive Vocabularium Coraianum.

Sm. [=Small] Folio.

Black inlaid binding. Mounted on paper.

<sup>14</sup> ドイツ・ボーフム大学のシーボルト資料室所蔵のものによる（整理番号 1.145.001、5オ）。ドイツ語の原稿以外に早くからいくつかの（部分）翻訳や紹介もあった（Osterkamp 2009: 190を参照）。

<sup>15</sup> しかし厳密に言えば、漢籍ではないことが編者 Edmond にもわかっていたことは、緒言の「A number of Manchu books and two or three in the Corean language have been included in this catalogue. [...] the Corean books happily had explanatory titles in Chinese.」で知られる。朝鮮本としては緒言にいう通り『倭語類解』以外にも1514年刊の『續三綱行實圖』（462番）と『林大將傳』（461番）の2部があったが、これらも現在ジョン・ライランズ図書館に所蔵されているかどうかは未確認である。



「倭」を誤って「Wei」と読んだのは Hoffmann による『倭語類解』という題名の転写を思い出させる。Siebold 自身による名称は、『日本』以前すなわち日本滞在期では「Wago-Rui-ge Moku-rok 倭語類解目録」などであり、『日本』の第 2 回配本（1833 年、VII: 44）にもまだ「Wa gio rui tok mok rok 倭語類解目録」のように日本漢字音に従うもののみであるが<sup>16</sup>、何年か後の Hoffmann が担当した部分では例外なく「Wei jü lui kiai」（第 7 回配本、1839 年、VII: 62 など）や「Wei jü lui kiai」（第 8 回配本、1840 年、VII: 166）のような中国語読みとなっている<sup>17</sup>。Hand list of the boudoir books では「jü」が「jii」と誤記されているのを別にすれば、まったく一致している。しかし、原題の転写のみならず、1881 年刊目録に見える題名全体がいかにも Siebold・Hoffmann らしいものであると言わねばならない<sup>18</sup>。

マンチェスター本の歴史をさらに遡れば、予想どおり Siebold 家が視界に入ってくる。一見では関係ないように見えるかも知れないが、大英図書館の和書コレクションに Siebold 旧蔵のものが多く、それらは Philipp Franz が死去して間もなく、長男 Alexander（1846～1908）が売ったものである。1867～1868 年に亘る Alexander と当時の大英博物館のやりとりを見れば、売りに出されていないものとして「a Corean Dictionary which my father had bought on his first voyage」（Friese 1983: 97 より再引用）が目立つ。これは、大英博物館にではなく、同じころ『日本』の残部を買い占めたロンドンの古書籍商 Bernard Quaritch（1819～1899）を通して、第 25 代クロフォード伯爵 Alexander Lindsay（1812～1880）に売ったのである<sup>19</sup>。

Alexander は第 1 回滞日で購入したとするが、Philipp Franz と Hoffmann の発言からすると、むしろ第 2 回滞日で購入したものではないとした方が妥当である。まず、（若干の重複はあるが）『日本』とは別に出版された『日本文庫』（原名 *Bibliotheca Japonica*）が完結した後、Siebold が述べるように（Siebold 1841: 8＝吉町 1941 [1977: 171]より引用）：

支那の表題が「倭語類解」〔“Wei jü lui kiai”〕と書かれてある特別な朝鮮の書籍が晩く我々に認識されたのを大に悲しむのであつて、其が爲に書寫された一本をも我が日本文庫に入れられるのを妨げられた。

ここで、朝鮮本『千字文』（巻 3、1833 年刊）と『類合』（巻 4、1838 年刊）を入れることができたのに、なぜ『倭語類解』は入れられなかったかが問題となるが、郭成章という人物が係わっているように思える。郭成章は、1802 年に福建省で生まれた人で、1830 年から 1836 年の間、Siebold の助手として『日本文庫』などのための石版を作る仕事をしていた。しかし、Siebold の助手となる前に他ならぬ Medhurst のところで同じような役割を果たしていたことが次の引用からわかる（Siebold 1841: 3f.＝吉町 1941 [1977: 163f.]）。

我々がバターフィアに居て、基督教宣傳の爲に派遣され同時に熱心な文法家なる最著名の W【alter】 H【enry】 Medhurst の家で日常生活を共にした時に、彼の所に秘書役をしてゐた支那人の熟練と勤勉とに此の著作の完全且綺麗な出版を我々は負うてゐる。此の人の名は郭成章〔Ko Tsching Dschang〕と云つて、我々に歐羅巴に隨行して五年以上原著作書寫に没頭した。

『千字文』や『類合』などの石版はそれぞれの表紙から明らかなように、郭成章が作ったものであるが、『倭語類解』の入手は 1836 年にライデンを去ってバタヴィアに帰っていつ

<sup>16</sup> 「解」とは訓を字音と誤解した結果であろう。

<sup>17</sup> 『日本』の朝鮮語関係部分の配本所属と出版年代に関しては Osterkamp 2009 を参照。

<sup>18</sup> 「原題の中国語読み+sive（または、すなわち）+ラテン語による簡潔な内容記述」という形式に従っているからである。1833 年刊の *Tsián dsú wén sive mille literae ideographicae* 「『千字文』即ち千字の表意文字」および 1838 年刊の *Lui hō, sive vocabularium sinense in kōraianum conversum* 「『類合』即ち朝鮮語に訳した中国語彙集」を参照。

<sup>19</sup> Kornicki (1993: 216; 217, 脚注 24) を参照。その題名は見られないが、ここでいう「a Korean vocabulary now kept with the Chinese collection」はマンチェスター本『倭語類解』を指す。

た前後のこととすれば、結局入れられなかった理由が見えてくる。郭成章の力無しでは『倭語類解』の石版による複製ほどのことは不可能なのであった<sup>20</sup>。

『千字文』と違って『類合』の方は日本で手に入れたものではなく、前者の複製版が1833年末に印刷されたのち、Paul Ludwig Schilling von Canstadt (1786~1837) からもらったものである<sup>21</sup>。二人の出会いは、Siebold が 1834 年に暫くサンクトペテルブルグに滞在していた間のことに違いない。

『倭語類解』が『類合』に更に遅れて使えるようになったらしいことは、Hoffmann の次の発言からも窺える（『日本』VII: 166=尾崎 1978: 248）：

一八三三年に『千字文』の原文の復刻がおこなわれたとき、それは朝鮮語についてわれわれに教えてくれるほとんど唯一の資料であった。『類合』や、ついに『倭語類解』までわれわれの手に入ったのはずっとあとになってからである。

以上をまとめてみると、マンチェスター本が 1830 年代に「日本からヨーロッパへもたされた」（『日本』VII: 62=尾崎 1978: 100）Siebold 旧蔵のものであるということになるが、それ以前のことについてはほとんど未詳である。「日本人の起原についての一言二言」の手稿によれば、『倭語類解』は「日本で 2 部しか現存しない」というが、本文より後に加筆されたところに「私は 1 部を手に入れる見込みである」ともある（5 才）<sup>22</sup>。飽くまでも憶測に過ぎないが、日本滞在中 Siebold が某日本人に『倭語類解』の購入を依頼したものの、実現が遅くなって Siebold の帰国に間に合わなかったため、1830 年代初年になってから、その当時 Medhurst が活躍していたバタヴィア経由で送られてきたと考えられる。

上に引用された両目録からもほぼ窺えるように、——その理由は明らかではないが——元の 2 巻が 1 冊に改装されたのみならず、各丁が版心で二つに切られ、更に匡郭以外の部分を切り捨てられた後、それぞれ台紙に貼り付けられた。1895 年の目録に 285×200 ミリとあるのも、実際には台紙のサイズを指している<sup>23</sup>。そして、改装の際、上巻と下巻の目録を合わせて、本文の前にくる総目録とした。

細かい調査の機会は未だ得ていないが、一応上下 2 巻の目録と本文が揃っているようである。ただし、下の表にあるように、他の 2 本と違って下巻の巻末に続く「口訣」で本書が終わる。

種別	丁数	濯足	国図	マン
「口訣」	2 丁	○	○	○
「伊呂波間音」	1 丁（口訣に続いて「三」）	○	×	×
刊記	1 丁（丁付け無し）	○	○	×

「伊呂波間音」が最初からなかったかどうか、今になってもう知るはずはないが、Hoffmann の記述でわかるように、1830 年代ヨーロッパに到着したとき、既に現状と同じであった（『日本』VII: 62=尾崎 1978: 99f.）。

二つ折判二冊、計一二葉の『倭語類解』は第一に朝鮮人の日本語入門用の辞書である。〔中略〕日本からヨーロッパへもたされた本書、朝鮮で印刷されたものであるが、序文も日付もない。

<sup>20</sup> 実際には郭成章が帰っていった後も石版を作る試みがあったが、かなり不器用な印象を与えるものになってしまった。1838~1840 年の間にその一部が出版された後中断された『日本』のフランス語版のために新たに作られた『類合』などの図版がそれである。Osterkamp (2009: 191, 脚注 7) を参照。

<sup>21</sup> この『類合』は、『日本』（VII: 61）にもあるように、元々ロシア人宣教師 Hyazinth が北京で朝鮮人からもらったものであるが、かくしてバチカン図書館の『伊呂波』と似たような背景があるのが面白い。

<sup>22</sup> Osterkamp (2009: 203f.) を参照。

<sup>23</sup> これに対して国立中央図書館本は 341×215 ミリ、濯足文庫本は 310×205 ミリという（鄭 1988: 127、浜田 1958: 3）。

112 丁とは、目録と本文の合計と推定されていたが（浜田 1977: 204）、実際には、丁付けのない目録を無視して上下巻の本文（56・54 丁）と「口訣」（2 丁）のみを合わせたものである。1830 年代に「伊呂波間音」がまだついていたらとすれば、計 113 丁となったはずである。（丁付けのない刊記に関しては未詳である。）

## 2.2. 『朝鮮偉國字彙』およびその底本と成立過程<sup>24</sup>

上にもふれたように、Siebold が「我々に最も親しい」（Siebold 1841: 7=吉町 1941 [1977: 169]）と見做していた Medhurst の『朝鮮偉國字彙』が出版されたのは 1835 年のことであるが<sup>25</sup>、『倭語類解』が Siebold のもとに届く直前のことであることと無関係ではあるまい。Hoffmann によると、「日本からヨーロッパへもたされた」（『日本』VII: 62=尾崎 1978: 100）というが、バタヴィア経由で送られてきたと考えてまず間違いはない。現在のところ、Medhurst が底本に用いた『倭語類解』が後に Siebold の所蔵となったそれと同一のものであるという確証は未だ見当たらないが、年代的にも二人の関係から見てもその蓋然性が極めて高いように思える。

『朝鮮偉國字彙』は、序文・索引などを除外すれば、『倭語類解』と『千字文』という二つの部分からなっているが、底本の由来、入手の方法などについては一切言及がない。とはいっても、まったく資料がないわけでもない。例えば、Medhurst が後者の方、すなわち『千字文』を Siebold とは関係なく先に入手したことが彼自身の書簡から明らかである<sup>26</sup>。1827 年 6 月 20 日の書簡に曰く（Medhurst 1828: 29f.）<sup>27</sup>：

No opportunity had occurred for ascertaining these facts until last February, when a number of Japanese books came into my hands, with liberty to make what use of them I could for several months, and to copy as much as I pleased. [...] Amongst the other books, I also met with the “Thousand Character Classic,” so well known in China, with a Corean translation and a Corean alphabet annexed; this I have also copied, with the hope of its proving useful to some of our Missionaries, who may in future have their steps bent towards Corea.

当時の、宣教関係やアジア関係の雑誌などに類似した記事がいくつかあり、和書を貸してあげた人物についての情報も若干含むものもある（American Tract Society 1837: 70）。

At length, when the attention of the missionaries in China had been drawn toward Japan, Mr. Medhurst, then residing at Batavia, being desirous of pushing his inquiries into the language, it was so ordained in the providence of God, that a Dutch ship from Nangasaki, on its way to Holland, put into Batavia for repairs. On board was a gentleman, who had

<sup>24</sup> 『朝鮮偉國字彙』に関しては小倉 1940: 73、金 1978、藤本 1979、李 1982、李 2000: 122-124 などがあるため、以下ではそれらの研究で既に明らかにされていることを省略することとする。

<sup>25</sup> *The Canton Register*（8 卷 30 号、1835 年 7 月 28 日、117 頁）や *The Chinese Repository*（4 卷 4 号、1835 年 8 月、195-196 頁）の報告からすると、1835 年の半ばごろの出版と見られる。

<sup>26</sup> Medhurst 本より先に出た Siebold による復刻本（1833 年刊）は、これとは底本が違う。（Siebold の底本は現在、ライデン国立民族学博物館に所蔵されている。）

<sup>27</sup> ちなみに、ここの引用で省略したところでは、『千字文』と同時に写す機会を得た字書・辞書などについて述べられており、Medhurst の *An English and Japanese and Japanese and English Vocabulary*（1830 年バタヴィアにて刊行）の底本を考える上の好資料である。この書簡と似たような内容のものとして、古賀 1966 にこの関連で取り上げられている Medhurst 著 *China; its state and prospects*（1838 年刊、276-277 頁）があるが、書簡の方がはるかに詳しい。

『蘭語譯撰』を *Vocabulary* の主な底本とする杉本説（杉本 1989: 210 など）から期待される通り、『蘭語譯撰』としか解釈できないものの記述が見られ、更に英和・和英辞典の編纂過程での役割を物語る「I have translated all the Dutch words into English, making an index of the whole, according to the English alphabet」という発言もある。しかし、『譯鍵』にあたるものもあるし、玉篇類と節用集類の字書・辞書も 1827 年の諸資料に含まれていたことがわかる。

また、Siebold にも『蘭語譯撰』が基礎をなしていることがわかっており、次のように述べているが、1830 年のバタヴィア滞在の際、直接 Medhurst から窺った情報と思われる（Siebold 1841: 20=吉町 1942 [1977: 193]）。「千八百三十年に最博學な Medhurst がバターフィアで石版にした辞書は、最著名な中津〔Nakats〕【奥平昌高】侯の庇護より江戸市で公刊された日蘭辞書【『蘭語譯撰』俗「中津辞書」一八一〇年】を基礎として構成された。」

collected Japanese books. Mr. Medhurst asked the loan of them. This he had for three months—and by employing Chinese copyists, possessed himself of several dictionaries in the Chinese, Dutch and Japanese languages—works precisely of the kind he needed. Out of this circumstance grew Mr. Medhurst's Japanese Vocabulary, [...].

姓名は明記されていないが、1827年2月に『千字文』をオランダ人であろう人物から借りて書き写す機会を得たことがわかる。さて、某オランダ人の正体であるが、候補として最も有力なのは1823年 Siebold と共に来日し、その後1826年末までオランダ商館長を務めた Wilhelm de Sturler であると思われる。Sturler がバタヴィアに向かって出帆したのは1827年1月の始めごろのことらしく (Kure 1996, II: 324, 482)、時間的には Medhurst の述べているところによく合う。さらに、Sturler の蔵書の中に『千字文』があったことは19世紀後半に活躍していたフランス人東洋学者の Léon de Rosny (1837~1914) の著作からも窺えるところである<sup>28</sup>。

Wilhelm de Sturler が死去して間もなく息子の Willem Louis de Sturler (1802~1879) によって Wilhelm 旧蔵書 (少なくともその一部) がパリ国立図書館に寄贈され Japonais 369 という整理番号で現在まで『朝鮮千字文』なるものが同図書館で所蔵されている (小杉 1992: 96 参照)。Medhurst 1835 の版心で『朝鮮千字文』とあるのは Medhurst が勝手につけた題名ではなく、原作に従ったことが分かる。Medhurst の底本となつたろう、この『朝鮮千字文』は、朝鮮本にしては奇妙な題目からも推測できるように、朝鮮本ではなく和刻本である。本文末に「萬曆十三年正月日副司果臣韓濩奉教書」とあり<sup>29</sup>、やはり、藤本 (1979: 15) の指摘どおり、Medhurst 本『千字文』は、韓石峯 (1543~1605) に遡る、いわゆる石峯本系統に属するものである。

朝鮮の刊本をもとに復刻された『倭語類解』にさえハングルの字形などに関する誤りが少なくないところからすれば、『千字文』の方はなおさらであろうと推測される。Medhurst 本とその底本を比較してみると、『東醫寶鑑』の和刻本ほど甚だしいものではないにしても<sup>30</sup>、『朝鮮千字文』が既に誤っているところが数多く存在することが明らかになるが、Medhurst 本が必ずしも底本のままではない、すなわち、単なる復刻ではないこともわかる。

その原因は、まず第一に、1833年に『朝鮮偉國字彙』の印刷が始まったときよりもずっと前に『朝鮮千字文』の刊本がもうその持ち主と共にヨーロッパへ行ってしまったため、1827年前半に Medhurst 自身あるいは中国人の助手——いずれにせよ朝鮮語やハングルに関する深い知識が期待できない人——によって行われた書写本によるしかなかったという事情がある。遅くともローマ字転写を付け加えようとしたときに、字形が曖昧なところや、正しいと思われる音節をなしていないところなどがあることに Medhurst が気づいたはずである。第二に、『倭語類解』の登場および英韓総索引と漢字索引の作成作業とによって、対照資料ができあがって上記のようなところを校正したり補ったりすることができるようになったこと

<sup>28</sup> すなわち、1861年の「漢・韓・アイヌ語彙集」で出典として挙げている「une belle édition chinoise coréenne du Livre des mille-mots qui appartient à la collection Stürler」(Rosny 1861: 262) がこれにあたる。Rosny 1864: 289にもまた登場する。

余談ではあるが、Rosny は1850年代に漢和韓満という多ヶ国語の『千字文』を出版するつもりであったようである。即ち、1854年刊の *Notice sur l'écriture chinoise et les principales phases de son histoire* の裏表紙に出版社の広告があるが、「sous presse」(印刷中)として挙げられているものの中に「TSIEN-TSE-WEN, le livre des mille caractères, publié en chinois, en japonais (*fira-kana*), en coréen et en mandchou, avec des vocabulaires, des notes, et remarques explicatives, etc. Paris, 1854. 8°。」がある。しかし、実際には出版されるに至らなかったようである。

<sup>29</sup> 見返しに「朝鮮國韓護書／朝鮮千字文／書林 赤松閣蔵版」、刊記に「大阪書林 〔順慶町心齋橋角〕河内屋茂兵衛／〔四軒町〕千草屋新右衛門求板」とあるのみで、その年代は明らかではないが、赤松閣の主人であった平瀬徹斎、通称は千草(種)屋新右衛門が登場するところからすると、18世紀のものと思われる。21丁に亘る本文(漢字・ハングル併記)は陰刻による。

パリ国立図書館以外に、東京都立図書館(安藤正次旧蔵本、特 6551)や関西大学図書館(内藤文庫、L21\*\*4\*752)にも所蔵されているが、全体的にみて伝本が少ないようである。

<sup>30</sup> ただし、『東醫寶鑑』の場合には、和刻本と中国の復刻本との関係も考慮に入れるべきかも知れない。

があげられる。そして、その際、朝鮮で出版された刊本として素人の手になった書写本より遥かに信頼性が高い『倭語類解』によったとは、想像に難くない。

いくつかの例を挙げてみれば、まず次のように字形の誤りをそのまま受け継ぐケースもあれば、

		『朝鮮千字文』	『朝鮮偉國字彙』
洪	너블 흥 [=흥]	(1 才)	(107 才)
致	닐월 더 [=티]	(1 ウ)	(107 ウ)
崑	피 [=피] 곤	(1 ウ)	(107 ウ)
人	사름 언 [=인]	(2 ウ)	(108 才)
問	무를 문 [=문]	(3 才)	(108 ウ)
彼	더 [=더] 피	(4 ウ)	(109 ウ)
因	지를 연 [=인]	(5 ウ)	(110 ウ)
映	비칠 명 [=영]	(6 ウ)	(111 才)
酒	글 [=술] 주	(18 ウ)	(120 才)
乎	온 흐 [=호]	(21 ウ)	(122 ウ)

字形の類似や底本における印刷の不鮮明さなどのため新たに生じた誤りもある。

	『朝鮮千字文』	『朝鮮偉國字彙』
結	밀 결 (1 ウ)	땀- (107 ウ)
豈	엇씨 괴 (4 才)	-씨- (109 才)
深	기플 심 (6 才)	-골- (111 才)
閑	겨럭 한 (16 才)	경-- (118 才)
※ 次の字「處」の右上にあり去声を表わす「○」をハングル字母と誤解したことによる		
彫	떠러덜 도 (16 ウ)	떠--- (118 ウ)

続いて、『倭語類解』と『千字文』の両方に出る言葉の場合、英韓総索引に基づいて統一された例であるが、かなりの数にのぼるようである。(ただし、必ずしも校正の場合のみではなく、廃止される語形が正しかったケースもある。)

	『朝鮮千字文』	『朝鮮偉國字彙』
英韓総索引		
地	싸 디 (1 才)	따 - (107 才)
	The earth, tta ti, 7-9 [『倭』上 7 ウ : 地 따 디] , 107-1	
冬	겨으 동 (1 才)	-으- (107 才)
	Winter, kyo oo, 3-1 [『倭』上 3 才 : 冬 겨으 동] , 107-6	
光	빛 광 (2 才)	빔 - (107 ウ)
	Do. [=Light] (shining), pit, 68-1 [『倭』下 12 才: 빔 광] , 107-14, 120-2	
海	바라 히 (2 才)	-다- (108 才)
	The sea, pa ta, 7-3 [『倭』上 9 才 : 海 바다 히] , 108-1	
羽	깃 우 (2 才)	질 - (108 才)
	A feather, tsit, 77-16 [『倭』下 21 ウ : 羽 질 우] , 108-2	
首	머리 슈 (3 才)	마- - (108 ウ)
	The head, ma ri, 16-1 [『倭』上 16 才 : 頭 마리 두] , 108-13	

- 女 겨집 녀 (4 オ) 계- - (109 ウ)  
A woman, key tsip, 42-1 [『倭』上 42 オ : 女 계집 녀] , 109-9
- 改 고틸 기 (4 ウ) -칠 - (109 ウ)  
To alter, ko ts'hir, 92[-]15 [『倭』下 36 ウ : 改 고칠 기] , 109[-]11, 115[-]15<sup>31</sup>
- 行 널 hing (5 オ) 벨 - (110 オ)  
To walk, neyr, 29-2 [『倭』上 29 オ : 行 널 hing] , 110-3

これ以外にも、『倭語類解』の語形へと校正されることがあるが、英韓総索引にはない漢字音の場合が多いので、今度は漢字索引を利用したと思われる。

- |   |   |                |
|---|---|----------------|
|   | 『朝鮮千字文』   | 『朝鮮偉國字彙』       |
| 張 | 베플 당 (1 オ)  | -- 장 (107 オ)   |
|   | 『倭』下 44 オ: 張大 장대など  |                |
|   | ※『朝鮮千字文』の당ではトの縦棒の下半がかけており、全体の字形は難解                              |                |
| 伐 | 베힐 벌 [=벌] (3 オ)   | -- 벌 (108 ウ)   |
|   | 『倭』上 39 オ: 伐 칠 벌  |                |
| 場 | 만 [=밭] 당 (3 ウ)  | 밭 장 (109 オ)    |
|   | 『倭』上 34 ウ: 場 터 장など  |                |
|   | ※なお、밭への訂正は英韓総索引による:   |                |
|   | A field, pat, 58-12 [『倭』下 2 ウ: 田 받 던] , 109-3 [3は2の誤り] , 116-14 |                |
| 善 | 어딜 쉰 [=션] (5 ウ)   | -- 션 (110 ウ)   |
|   | 『倭』上 23 ウ: 善 잘힐 션   |                |
|   | ※『朝鮮千字文』の션は字母ハの半分を欠いている   |                |
| 美 | 아름다올 이 [=미] (7 オ)   | ---- 미 (111 ウ) |
|   | 『倭』上 19 オ: 美 아름다올 미   |                |

最後に、藤本（1979: 16f.）によって指摘されているとおり、Medhurst 本と石峯本系統の『千字文』の間には訓が異なる場合が四例あるのだが、これらを『朝鮮千字文』と比べてみると、次のようになる。

- |   |                  |              |
|---|------------------|--------------|
|   | 『朝鮮千字文』          | 『朝鮮偉國字彙』     |
| 道 | 도리 도 (3 オ)       | -- - (108 ウ) |
| 思 | 스렁 [=스랑] 스 (6 ウ) | -링 - (111 オ) |
| 渠 | 걸 거 (16 ウ)       | 몹 - (118 ウ)  |
| 領 | 깃 녕 (21 オ)       | 녕텅 (122 オ)   |

すなわち、「道」と「思」では、Medhurst 本が『朝鮮千字文』にそのまま従ったことがわかるが（ただし、랑の誤記である링を更に링に誤ったという違いはあるのだが、これ以外にも所々見られるような誤写の範囲を出ない）、「渠」と「領」となると、そう簡単に片付けることはできない。まず、後者について言えば、『朝鮮千字文』の녕がかなり曖昧な、텅にも似たものとなっているが、Medhurst 本の녕텅は両方この녕によったと見られる。底本にあ

<sup>31</sup>最後の「115[-]15」は「更 공틸 핑」にあたるもので、実際には고칠に統一されていない。これも「閑」の例と同じく、後続する「霸」の右上についている去声の「o」が誤解されて『朝鮮千字文』の고틸が공틸となったものである。고칠からかなり離れた語形になっていたため統一されなかったとしても、なぜ「ko ts'hir」のものとして羅列されているか説明がつかない。

る刃は、どういうわけか現れないが、あるいは書写段階における間違いと考えられる。녕 텅のごときは何らかの誤りの結果でしかありえない。

続いて「渠」であるが、その訓が刃ではなく 𠂔 となっているのは、次のように説明できる。まず、『朝鮮千字文』の刃は、実は ㄷ と ㅈ の横棒とにそれぞれ一部がかけており、解しがたい字体となっている。しかし、幸いに Medhurst が「渠」と同義と見做していた字が他にもあった。『千字文』では「In the pools」と英訳されているが、英語 pool の対訳としての「渠」は Medhurst の『英漢辞典』にも見出される (Medhurst 1847-1848, II: 979)。そこで、英韓総索引の「A pool, mot tsi, 9-10 [『倭』上 9 ウ : 池 ㅁ ㅈ], 116-15 [『千』14 オ : 池 ㅁ ㅈ]」に従って、「渠」の訓をも mot すなわち ㅁ として、解説できないところを補ったのであろう。

全体的にみれば、『倭語類解』が果たしていた役割は決して底本としてだけでなく、和刻本である『朝鮮千字文』に既にあった、あるいは、書写段階で新たに生じた誤りを校正するための対照資料の役割も兼ねていたことが明らかになる。そして、上記の諸例からも窺えるように、Medhurst 本『千字文』は、単なる翻刻+英訳本ではなく、『倭語類解』があつて初めて可能となった、いわば校訂本の性質をも持っているものと見るべきであろう。

続いて『倭語類解』の部分であるが、『朝鮮千字文』とは入手の事情が違ふことは上記のとおりである。この場合も、また Medhurst の書簡が情報源となるが、今度は 1833 年 1 月 29 日のもので *The Chinese Repository* (1 巻 12 号、1833 年 4 月、509~510 頁) に匿名で引用されている。

I have lately got possession of a *comparative vocabulary of the Chinese, Corean, and Japanese* [languages を欠く], published by the Coreans, for the sake of enabling them to learn Japanese. This I have been enabled most fully to decypher, partly by the help of a Corean and Japanese alphabet, and partly by the aid of Gutzlaff's Corean and English alphabet; so that I can pretty accurately affix the sound and meaning to every word. It is my intention to print it immediately, as I conceive it will be of vast importance in the present crisis; and though I have been a considerable loser by my former attempt, yet that shall not deter me from trying something of the same kind again, though on a far different plan,—printing only a small number, in the Chinese way, and adapted to Chinese students.

また、同誌 (2 巻 3 号、1833 年 7 月) に掲載された「The Corean Syllabary」の中に

[...] we have lately received some sheets of a valuable publication, now printing at Batavia, viz. a *Comparative Vocabulary of Chinese, Corean, and Japanese*, [...].

とあるところから、1832 年末ごろまでに Medhurst の手に入った『倭語類解』に基づいて、約 2 年間かかった『朝鮮偉國字彙』の印刷が 1833 年の半ばごろから始まったことがわかる。

両底本の由来がある程度明らかにされている今、『朝鮮偉國字彙』に見られるハングルのローマ字転写法が問題となるが、Medhurst の序文には「a Japanese and Corean alphabet brought from Japan」と「an English and Corean alphabet which appeared in a periodical publication at Canton」とによつたとある。広東の定期刊行物というのは、言うまでもなく *The Chinese Repository* のことなので、後者は、1833 年 1 月 29 日の書簡にも登場する「Gutzlaff's Corean and English alphabet」すなわち同誌所載の「Remarks on the Corean language」(1 巻 7 号、1832 年 11 月) および上記の「The Corean Syllabary」である。前者は、1827 年の書簡にも言及されている、『千字文』についていたものを指すであろう。(ただし、遺憾ながらパリの Sturler 旧蔵本には伝わっていないようである。)

Medhurst の転写法の特徴といえ、朝鮮語の母音を長短の 2 種類に大別することにあるが、これと同様の音注は 18 世紀の日本資料にもあるし、明治時代の教科書類などにもまだ所々見られる。ただし、それぞれの母音が長短のいずれに所属するかは資料によって様々である。

	1763 『昆陽漫録』	1794 『象胥紀聞』	1798 『雞林文譯』	1833 『日本』第2回配本	1835 『朝鮮偉國字彙』	1894 『日韓會話』	1904 『日韓通話』
ト	長	短	短	非短	長	長	長
ト	短	短	短	非短	長	長	長
ト	長	短	短	長	長	長	長
ト	長	短	短	長	長	長	長
ト	短	?	長	短	短	短	長
ト	短	長	長	短	短	短	短
ト	長	短	長	長	長	長	長
ト	短	長	長	長	長	長	長
ト	短	?	短	短	短	短	短
ト	短	短	短	長	長	短	短
ト	短	長	短	短	短	短	短

Sturler 旧蔵の「Japanese and Corean alphabet」が発見されなければ、確実に知ることはできないにしても、Medhurst の転写法からすると、Siebold のそれと同じように、日本で行われていた伝統を汲むものと推定して差し支えないように思える。

### 3. 参考文献

- 遠藤光暁 他 編 (2009) 『譯學書文獻目錄』 서울 : 박문사  
小倉進平 (1940) 『増訂朝鮮語学史』 東京 : 刀江書院  
許雄 (1965) 『改稿新版 國語音韻學』 서울 : 正音社  
金斗應 (1978) 「Medhurst 의 『朝鮮偉國字彙』 에 대하여」 『국어교육』 33, 141~152 頁  
小杉恵子 (1992) 「パリ国立図書館における18 - 19世紀収集和古書目録稿 — ティチング・シーボルト・ストゥルレル・コレクションを中心として—」 『日蘭学会会誌』 17.1: 85~103頁  
尾崎賢治 訳、シーボルト 著 (1978) 『日本』 第五卷、東京 : 雄松堂書店  
杉本つとむ (1989) 『西洋人の日本語発見 : 外国人の日本語研究史 1549~1868』 東京 : 創拓社  
辻星児 (2007) 「重刊改修捷解新語の諸本とその板木」 『文化共生学研究』 6: 137~147 頁  
鄭光 (1988) 『司譯院 倭學 研究』 서울 : 太學社  
浜田敦 (1958) 「倭語類解説」、京都大學文學部國語學國文學研究室 編『倭語類解』 京都 : 京都大學國文學會、1~8 頁  
——、福島邦道 (1965) 「附録解説」、京都大學文學部國語學國文學研究室 編『弘治五年朝鮮板伊路波』 京都 : 京都大學國文學會、43~69 頁  
—— (1970) 「弘治五年朝鮮板『伊路波』 諺文対音攷」 『朝鮮資料による日本語研究』 東京 : 岩波書店、77~91 頁  
—— (1977) 「近隣諸国に関する情報 : 朝鮮」、岩生成一 他 編『シーボルト「日本」の研究と解説』 東京 : 講談社、198~207 頁  
藤本幸夫 (1979) 「『朝鮮偉國字彙』 について」、別冊、『朝鮮偉國字彙』 東京 : 雄松堂書店  
北京大学中国語言文学系語言学教研室 編 (1989) 『漢語方音字彙』 北京 : 文字改革出版社  
民族文化推進會 編 (2000) 『青莊館全書Ⅲ 海石遺稿』 (『影印標點 韓國文集叢刊』 第 259 卷)、서울 : 景仁文化社  
安田章 (1960) 「重刊改修捷解新語解題」、京都大學文學部國語學國文學研究室 編『重刊改修捷解新語』 京都 : 京都大學國文學會、1~62 頁  
—— (1970) 「伊呂波雜考」 『国語国文』 39.3: 48~60 頁 [安田章 (1980) 『朝鮮資料と中世国語』 東京 : 笠間書院、174~189 頁]  
吉町義雄 (1941) 「施福多「日本文庫及日本文學研究提要」 (前)」 『文学研究』 30 [吉町義雄 (1977) 『北狄和語考』 東京 : 笠間書院、155~182 頁]



- (1942) 「施福多「日本文庫及日本文學研究提要」(後)」 『文學研究』 32 [吉町義雄 (1977) 『北狄和語考』 東京：笠間書院、183~219 頁]
- 李應鏞 (1982) 「19 세기 중국 개신교 선교사들의 한국어 연구」 『明大論文集』 13、7~62 頁
- 李基文 (2000) 「十九世紀 西歐 學者들의 한글 研究」 『學術院論文集 (人文・社會科學篇)』 39、107~155 頁
- American Tract Society** (1837): *Twenty-third annual report of the American Tract Society, Boston, presented at Boston, May 31, 1837*. Boston: Perkins & Marvin.
- Anonymous** (1833): “Religious Intelligence. Batavia”. In: *The Chinese Repository* 1.12 [April, 1833]: 509f.
- Anonymous** (1833): “The Corean Syllabary”. In: *The Chinese Repository* 2.3 [July, 1833]: 135–138.
- Anonymous** (1881): *Bibliotheca Lindesiana. Hand list of the boudoir books*.
- Edmond, John Phillip** (1895): *Bibliotheca Lindesiana. Catalogue of Chinese books and manuscripts*. Privately printed.
- Gützlaff, Karl** [Gutzlaff, Charles] (1832): “Remarks on the Corean language”. In: *The Chinese Repository* 1.7 [November, 1832]: 276–279.
- Hager, Joseph** (1799): “Alphabet of Corea – Extracted from a Japanese Book and Explained by Dr. Hager of Vienna”. In: *The Oriental Collections* 3: 88–93.
- Hervás, Lorenzo** (1800–1805): *Catálogo de las lenguas de las naciones conocidas, y numeracion, division, y clases de estas segun la diversidad de sus idiomas y dialectos*. 6 vols. Madrid: Imprenta de la Administracion del Real Arbitrio de Beneficencia.
- Kornicki, Peter F.** (1993): “The Japanese collection in the Bibliotheca Lindesiana”. In: *Bulletin of the John Rylands University Library of Manchester* 75.2: 209–300.
- Kure Shūzō** 呉秀三; **Trautz, Friedrich M.**; **Walravens, Hartmut** (ed.) (1996): *Philipp Franz von Siebold. Leben und Werk*. 2 vols. München: iudicium.
- Medhurst, Walter Henry** (1828): “Extracts of a Letter of the Rev. W. H. Medhurst, Missionary at Batavia, dated 20th July, 1827;—addressed to the Directors”. In: *The Evangelical Magazine and Missionary Chronicle* 6 [Missionary Chronicle for January, 1828]: 29–31.
- (1830): *An English and Japanese and Japanese and English Vocabulary. Compiled From Native Works*. Batavia.
- (1835): *Translation of a comparative vocabulary of the Chinese, Corean, and Japanese languages: to which is added the Thousand Character Classic, In Chinese and Corean*. Batavia: Parapattan press.
- (1847–1848): *English and Chinese dictionary*. 2 vols. Shanghai: Mission Press.
- Osterkamp, Sven** (2009): “Selected materials on Korean from the Siebold Archive in Bochum — Preceded by Some General Remarks Regarding Siebold’s Study of Korean”. In: *Bochumer Jahrbuch zur Ostasienforschung* 33: 187–216.
- Pelliot, Paul**; **Takata Tokio** 高田時雄 (ed.) (1995): *Inventaire sommaire des manuscrits et imprimés chinois de la Bibliothèque Vaticane. A posthumous work by Paul Pelliot. Revised and edited by Takata Tokio*. (Italian School of East Asian Studies Reference Series; 1). Kyoto: Istituto Italiano di Cultura, Scuola di studi sull’Asia orientale.
- Rochemonteix, Camille de** (1915): *Joseph Amiot Et les Derniers Survivants de la Mission Française a Pékin (1750–1795)*. Paris: Librairie Alphonse Picard et Fils.
- Rosny, Léon de** (1861): „Vocabulaire chinois-coréen-aino, expliqué en français, et précédé d’une introduction sur les écritures de la Chine, de la Corée et de Yéso“. In: *Revue Orientale et Américaine* 6: 261–284.
- (1864): „Aperçu de la langue coréenne“. In: *Journal Asiatique (Sixième série)* 3[.3–4 = Mars–Avril 1864]: 287–325.
- Siebold, Philipp Franz von** (1832ff.): *Nippon. Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen Neben- und Schutzländern*. Leiden: Bei dem Verfasser.
- (1833): *Tsián dsú wén 千字文 sive mille literae ideographicae. Opus Sinicum origine cum interpretatione Kooraiana, in peninsula Koorai impressum*. Leiden: Ex officina lithographica editoris.

- (1838): *Lui hō* 類合, *sive vocabularium sinense in kōraianum conversum; Opus Sinicum origine in peninsula Kōraï impressum*. Leiden: Ex officina lithographica editoris.
- (1841): *Isagoge in Bibliothecam Japonicam et studium literarum japonicarum*. Leiden: Apud Auctorem.
- Van Damme**, Daniel (1978): *Necrologium Fratrum Minorum in Sinis*. 3rd ed. Hong Kong.
- Willeke**, Bernward H. (1991): “The Report of the Apostolic Visitation of D. Emmanuele Conforti on the Franciscan Missions in Shansi, Shensi and Kansu (1798)”. In: *Archivum Franciscanum Historicum* 84: 197–271.
- Wiśniowski**, Grzegorz Antoniu (1999): “O. Romuald Kocielski OFMRef. (1750-1791) i jego podróż na misje do Chin”. In: **Prejs**, Roland (ed.): *W kręgu dziejów Kościoła i rodziny franciszkańskiej*. Warszawa: Bracia Mniejsi Kapucyni, pp. 335–342.